

要するに、所謂云ふことを聞かぬ子どもと云ふものは單に我儘や一時の事情で現はれるもの、外に、深き根帯を有する原因即ち教育の目的や方法が子どもの資性と觸接して教育と云ふ活動が起らうとする其所に根を持つた所の原因からして出で来るもので、何處の幼稚園に於ても、又何の子どもを採つて見ても、必ず一人二人は有る可き筈のもので之を全然除くなど、云ふことは事實空論に過ぎぬことであるから、教育者たるものは是等の事實に出會しても妄りに落膽したり失望したりしないで、常に如何にせば是等の特別兒を扱ひ得るかに就いて考慮して置いて、臨機應變の處置を巧みに採ることが必要である。此臨機の處置に就いて多くの輕験と多くの考案とを有する人が尤も老練なる教育家たるに必要な一資格である。

楠 母

は、そ葉のまもりしなくば桶の

このみ空しくくちぬべきかな

愛兒を失ひし二三の實例

戸 倉 廣 雅

三六

茲に教育なき母親の真心より出でた話の面白き實例を擧げて見る。余の近所に大木某といふのがある。向ふ三軒兩隣りの御多分の義理と缺かさぬ一と通りの交際をして居る。今日はとか、お早ふとか、今日は御天氣とか、いやとふも雨で困ります、御同様で位の會話は、これは男同志の普通例、この會話からは、別に何も湧いて来ないが、女同志は辭の多いもの、さてはや一寸往來の立話にも十分や二十分は物の數ではない。世間話や迷信話をよく聞かされて居るのは、余の妻君である。ところが此の大木某に二人の女の兒があつて姉のみね子は今年八歳での學齡兒近所の學校へこの四月入學したてのたい盛り、妹の貞子はまだ四つ五つの煩はなさ、いたづらが其の日の仕事、姉のみね子は惣領のことゝて、兩親の寵愛と一方なら

ぬ手の屈き加減、痛いも痒いも、人に向ては何角
 との自慢、日増しに道理が解つて来て益々両親の
 愛が集中した、他人に四五人の兒があれば、此の
 一人でこれに匹敵せしめやうとする親の奮發、我
 が子を思ふ親の心は大抵こんなものであらふ。
 ところが道長ならぬ缺けたることの多き世の中、
 天は腦膜炎といふ恐ろしき病を、此のみね子に與
 へたので、花も紅泥と化する五月の初め、憐れ病
 むこと僅か一日翌日の午前不歸の客となつた。
 いかにも果敢なき人世とはいへ短きものは此の兒の
 數命と、返らぬことを繰り返して両親の袖の乾く
 間もなく、なく／＼野邊の送りを濟ませたが、未
 だに我が子の面影が眼にちらついて、さうあつけ
 なく彼の世へ往つたとは思はれぬ終二三日内には
 歸つて来る と感ぜられてならぬとの述懐、余も
 妻君も五歳の長女を失つた経験から割出しても、
 同情の涙を禁じ得ぬので、世間話や迷信話は鼻の
 先きであしらつても、これ程の誠は、ホンに御氣

の毒と遇ふ度毎に繰り返さしめられたのである。
 憐れなことはよく集つて来るものである。余が知
 れる今一人中田某といふのがある。これには女兒
 三人男兒三人あつて、余と匹敵する子福者である
 が、この方は主人公老人で長女は我が儘もの、婿
 撰み、嫁には往つたが亭主を口の先で丸めて三日
 に一度の里歸りを繰り返して遊んで暮して居る。
 妹のすゝ子は今年は二十の女盛り、器量は姉に比
 べては聊か二の町であれど、體格美は姉には優つ
 て、尤も無口で勉強で迄所での評判娘、余も近
 所がてら彼の女が十四歳の秋頃から知り初めた。
 姉の我儘にも驚いたが、姉妹雪と墨の此の妹の温
 順にも驚いた位である。両親も亦姉の我儘に愛想
 をつかし、妹の温順を愛して居る。姉が印刷工女
 で成功した擧に倣ふて小學校を終るか終らざるに
 印刷局へ勤めの身、稼いだ金は懸ての嫁入仕度と
 両親は指折數へて成功の曉を樂んで待つて居る。
 此のすゝ子嬢近頃は少しも顔が見えないと噂して

暮すも浮々と三四箇月も經つて聞けば腸胃の病氣で未だに床を離れぬ長煩ひとのこと、母親は嘆息して彼の子は今まで碌々薬を飲んだこともない壯健な、兄弟中で一番丈夫と安心して居た甲斐もなく、斯る長煩ひととなつて、當人のやむを得ざるを、看護する親も氣が氣でない、余の妻君が度々聞かされたが、さて終には腹膜血核とかいふ重病と變じ正に半年の床ずれに身動きならぬまでの容態と變り、醫者も見放す憐れの終り、花の盛りの二十歳も誠の春は知らずして、空も五月雨のさめざめと降る涙の中に野邊のいとなみ濟みたれど、濟まぬは兩親の心の中、多くの小供の其の中に彼の子ばかりは眞の子供と思ふて居たが、今となつては一番不孝、年とつた兩親に憂き目を見るも、思へば天道恨めしと、逢ふ人毎に語つて居た。

さて子を持つた親の愛、子を失つた親の心、何れ優り劣りはなきものである。此の兩家の妻君が余の妻君に漏らした嘆息が即ち話の種となるので

ある。

中田某の妻君は余の妻君に語つて曰く大木のみね子さんは年は漸く八つである、小學校へやつと入校した幼稚な兒で、尤も煩ふことたつた一日、苦勞も漸く一日のこと、到底助からぬものなら、一日の中に形付く方は未だ呆らめやうはあつたもの、家のすゝは半年も長い間、兩親に莫大の苦勞をかけ、尤も二十歳までも無事に育て上げたのが、たつた一段の上り際で、どしんと本の土に歸る、算盤取つても御覽なされ、差引非常な損耗でと、どふやら大阪辭で結びさうな嘆き振りであつた。

大木某の妻君は余の妻君に語つて曰く、中田のみね子さんは最早二十歳にもなつて道理も解つて来たところへ半年も兩親の介抱を受け、金で買はれぬ慈愛の味を嘗め盡して、醫者も見放すまでに厄介になれば、子供としても遺憾なければ親も壽命と呆らめよいが、家のみねを御覽せ、たつた一日

の煩ひ、両親の愛を十分注ぐ暇とてもない、残り多しことをして呉れました。同じ不幸とはいふもの、みねほど不仕合せなものはありません。

両方の嘆きを一身で聞いたは余の妻君、當人同志に相向つて言はしめたら果ては喧嘩になりそうない言ひ分も、詮ずるところ我が子の愛に牽かされての誠である。余の妻君は無學で、最も余よりも諦

めのよい單純反頭の女であるが、此の如き二人の母親の述懐を聞いて、余に語つて曰く家の喜美江こそ彼の二女を失つた不幸にも勝つたものであれ、器量も數倍優等ばかりでなく、舉動言語神々

しきまでに優美であつて、尤も家が貧窮の至極の際に世を辭したのであるから、あの時、金があつて十分療治したらばとか、切めては好きなものでも興へてとか、思ひ出の種は洋々として涙と共に

盡きぬ、さてもきみ江は天下に異例のない不幸者である。

これでは丁度禪學問答めいた話で終つたのである

が、何れも無學の妻君運ながら、我子いとしと思ふ親心は貴賤貧富をおしなべて苦しきものであるといふ實例は甚だ多いことであると思ふ。子を思ふ道に迷ひぬる親の心は眞に憫なるものである。

白　蓮

泥のうちより　ぬけいで、
濁にしまぬ　はなはちす

月のひかりか　ひるすごく
霜とさゆれば　夏さむし

亂るゝつゆは　たまとみえ
かをれる風は　身にぞしむ

氷のすがた　雪のいろ
つゆなげがしそ　世のちりに

白　菊
草木もかけれし　その、うち
雪にも色は　まさりぐさ

いたやく霜は　身をよそひ
さえゆく月に　香にほふ

露はくすりと　きくのみづ
梅はみさをの　おのがとも

やみの夜半さへ　てらすなり
東籬のもとに　文や見ん